

Corneilleの*Don Sanche d'Aragon* について

村 瀬 延 哉

(序)

本論では、P. Corneille の英雄喜劇と銘うたれた作品《Don Sanche d'Aragon》を通じて、彼の政治的立場更に広く言うなら世界観の一端が、どのような形で作品に反映しているかを検討する。

一章では、まずMazarinと作者の関係に触れる。次に、作者のMazarinへの親近感が、フロンドの乱時代の幾つかの史実を、作品中に登場させる結果になったことを明らかにする。二章では、《Don Sanche d'Aragon》に典型的に現れる、法服貴族としてのCorneilleの世界観を分析する。

(1)

《Don Sanche d'Aragon》の初演月日には、Corneilleの多くの作品がそうであるように、不明瞭な点が多い。1650年4月11日にPrivilègeを受け、同年5月14日に印刷を完了しているから、初演は当然これ以前である。だが、どの時点まで溯るべきかは判断が別れる。

初演時が問題になる理由の一つは、作者が、この作品は当初輝しい成功を収めたにもかかわらず、或る有力な人物の意に叶わなかったため、失敗に終わったと述べている点にある。

«Elle eut d'abord grand éclat sur le théâtre, mais une disgrâce particulière fit avorter toute sa bonne fortune. Le refus d'un illustre suffrage dissipa les applaudissements

que le public lui avait donnés trop libéralement, et anéantit si bien tous les arrêts que Paris et le reste de la Cour avaient prononcés en sa faveur qu'au bout de quelque temps elle se trouva reléguée dans les provinces, où elle conserve encore son premier lustre.¹⁾》

《Don Sanche d'Aragon》に敵意を示し、その意向一つで作品の成否を決することができた宮廷の有力者とは誰だったのか。1722年 Baillet は《Jugements des savants》の中で、la Monnoye の証言を引用して、Condé大公（Louis de Bourbon, prince de Condé）の名を挙げている²⁾。ところで、後に述べるように、Condé大公は50年1月18日に逮捕され、以後13ヶ月を Vincennes の牢獄で過しているから、《Don Sanche d'Aragon》の初演が、それ以後なら、作品に異議をさしはさむことができなかつたはずだ。一方、19世紀になって、François de Neufchâteauが、王妃 Anne d'Autriche と Mazarinこそ、作品を不成功に終らせた張本人であるという仮説を提出した。清教徒革命の波及を懸念する彼らは、Don Sanche がクロムウェルを連想させることに不安を抱いたのである。だが、この説はあくまで仮説であって、裏づけに欠ける³⁾。

我々は、G. Couton の綿密な実証に従いながら、以下問題の人物が Condé大公であり、従って初演時は50年1月初旬であることを明らかにしたい。この解明は、必然的に Corneille と Mazarin の関係に焦点をあてることを意味する。そして、両者の関係の解明と、作品への影響こそ、本論の主要なテーマの一つであることを改めて付言しておく。

1642年の Richelieu の没後、宰相の地位について Mazarin は、前任者程文芸の良き保護者ではなかつた。Naudé の《Mascurat》（正式の題名は《Jugement de tout ce qui a été imprimé contre le cardinal Mazarin depuis le 6^e janvier jusqu'à la déclaration du 1^{er} avril 1649》）は、Mazarin

が文人に保護を与えなかったため非難されていたこと、Naudéにしても、Mazarinを吝嗇の非難から擁護するのは容易でなかったことを、伝えている。⁴⁾

そのMazarinも、Corneilleには格別の好意を示したようだ。Naudéによれば、Corneilleは、43年に100 pistolesの年金を、Mazarinから授かっている。このためCorneilleは、43年末か44年始めに書かれた《Remerciement à M. de Cardinal Mazarin》中で、彼の悲劇の古代ローマの英雄達（Horace, Auguste, Pompée）に宰相をたとえながら、おおげさに謝意を表している。44年の《La Mort de Pompée》の献辞も、Mazarinに捧げられた。

故ルイ十三世を称えた《Les Triomphes de Louis le Juste》が49年に出版された。王の銅版彫刻師Valdorを中心として進められた作業の中で、Corneilleは、前王の偉業を示す版面に添えられた6行詩の作成にあたっている。出版に占めるCorneilleの責任は、非常に重いものであったらしい。⁵⁾ところで、6行詩の1つは、ルイ十三世と直接関係のない事件にあてられている。1630年Mazarinの名を一躍高からしめた《l'affaire de Casal》がそれである。フランス軍とスペイン軍が対峙して、銃弾の飛びかう中を、Mazarinは教皇特使としてただ一騎、両軍の間に割って入り、見事戦闘を鎮めた。

« Lorsque Mars se prépare à tout couvrir de morts,
Un illustre Romain étouffe ses discords,
En dépit des fureurs en deux camps allumées.
En ce moment à craindre il remplit nos souhaits ;
Et se montrant tout seul plus fort que deux armées,
Dans le champ de bataille il fait naître la paix.⁶⁾ »

CorneilleとMazarinの結びつきを最も良く示しているのは、Corneilleが50年2月にノルマンディ州検事（procureur des Etats de Normandie）に任命されたことであろう。

パリに始まった第一次フロンドはノルマンディにも波及して、州総督 Longueville 公は、ルーアンの高等法院と結んで王権に抵抗した。パリ高等法院と王権の和解が Rueil で成立した直後の49年4月、ルーアンでもフロンド派とマザラン派の間に一応平和が訪れる。しかし50年1月 Mazarin は、ロクロワの戦いにおける国民的英雄であり、第一次フロンドの解決にも功績のあった Condé 大公と、その弟 Conti 公及び彼らの義兄にあたる Longueville 公を逮捕する。フランス貴族名門中の名門に属する彼ら一族の不穏な動きは、Mazarin の政権の座を危うくするものであったからだ。第2次フロンドの発端となるこの事件の後、Longueville 公夫人は反乱を扇動する意図でルーアンに赴くが失敗し、Pays-Bas に逃れる。ノルマンディが反乱の拠点となることを恐れた Mazarin は、若きルイ十四世と、その母摂政 Anne d'Autriche と共に、2月ルーアンを訪れる。Longueville 派で地方の要職にあった人々はただちに罷免され、Mazarin の信頼厚い人物が、後任にあたった。Corneille が、《有能かつ、その忠誠心及び敬愛の念^ヲ》に疑いなしとされて、ノルマンディ州検事に就任したのは、このような事情からである。

以上の事実からして、1650年の時点で Corneille が、政治的に Mazarin に近い立場にあったことは、ほぼ間違いないであろう。以下、彼のこの立場が、《Don Sanche d'Aragon》にどのように反映されているかを検討していく。

まず《Don Sanche d'Aragon》のあら筋を、Corneille の Argument に従って、たどってみる。

— Aragon の王 Don Fernard は、伯爵 Don Garcie の謀叛により国を追われる。その頃、王妃 Donne Léonor は、don Sanche と呼ばれる息子を生んだ。王は謀叛人の残虐な追求を恐れて、息子を腹心の部下 don Raymond に拉致させる。don Raymond は、赤ん坊をなくした漁夫の妻に、

don Sancheの養育を委ねるが、子供の素性は明さない。ただ、小さな宝箱を与えて、いつの日か、それをdon Sancheの手から、Aragon王と王妃に献上させるよう言い残す。戦場から戻った漁夫は、don Sancheを我が子と信じて育てる。王妃は、宝箱の秘密以外、息子の行方を知らされなかった。彼女が執拗に尋ねるので、Don Fernardは最後にdon Sancheは死んだと、偽りの答をする。その後Don Fernardは、Don Garcieとの劣勢な戦いを挽回できぬまま死ぬ。王妃は、夫の遺言に従い、Castilleに亡命して、don Sancheの妹donne Elvireを生む。一方、王子don Sancheは己れを漁夫の息子と信じたまま、16の年に親許を出奔し、Castille王の軍に身を投じる。Castilleはモール人を相手に、激しい戦いの最中であつた。卑しい素性を知られまいとして、彼は、育て親がつけたSancheという名を捨て、Carlosと名乗る。この偽名の下に、彼は数々の驚くべき武勲をたて、don Alphonse王に重んじられる。彼は戦闘の際、王の命を救う。しかし、彼の勲功に報いる前に、王は急死し、後には王の妹で、王位継承者のdonne Isabelleと、Aragonの王女donne Elvireの、Carlosへの熱い眼差だけが残された。Carlosの武勲を感嘆する余り、二人共彼を愛するようになったのだが、彼女達の生れの高貴さ故に、この愛はおし隠されて日の目をみない。彼も又、二人に対し情熱を燃していた。ところで、Castilleの大貴族達は、近隣にdonne Isabelleと結婚し得るほどの王がいなかったから、競ってその座を争った。そのため、内戦が生じかねない情勢になった。不幸を避けるため、donne Isabelleは夫の選択を迫られる。彼女は、あらかじめ適任と思われる三人の候補を選ばせた後、そのなかに彼女の意に適う者があれば結婚すると、約束する。三人の候補に、don Manrique de Lare, don Lope de Gusman, don Alvar de Luneが選ばれる。don Alvarはdonne Elvireを愛していたが、指名の名誉を放棄するなら、女王を侮辱することになると思ったのである。don Garcieと、息子don Ramireの暴政に悩まされていたAragonの民衆は、彼らをSaragosseから追放する。Jacaの砦に彼らを包囲する一方、Castilleに亡命した女王達に帰国を要請

する。二人の暴君はJaca攻略の最中に殺される。彼らが6年来Jacaの地で捕虜としていた don Raymond は、民衆に彼らの王 don Sanche の生存を知らせる。その後彼は、育ての父の漁夫が、don Sanche を探しに Castille に向かったことを知り、後を追う。don Raymond が Castille に到着して、Carlosの身許が判明する。donne Isabelle は、三人の候補者の同意を得て、don Sanche と結婚し、donne Elvire も don Alvar と結ばれる。—

《Don Sanche d'Aragon》の sources として、Corneille は2つの作品を挙げている。スペイン喜劇《Palacio confuso》と、Juvenel の小説《Don Pélage ou l'entrée des Maures en Espagne》である⁸⁾。前者からは《Don Sanche d'Aragon》の一幕の構想を得た。つまり、女王が臣下の中から夫を選ばねばならぬという設定。この席で、成り上り者の兵士が、貴族にだけ許されている着席の権利を要求する。貴族達が拒否すると、彼は、自分は偶々漁夫に育てられただけであると言って、輝しい武勇の数々を披瀝する。女王が彼に着席を許し、貴族に叙する。更に夫の選択を彼に委ねる等々。

Juvenel の小説からは、主として五幕で明らかになる主人公の数奇な境遇を借用している。敵の報復を恐れる女王は、生れたばかりの王子を、密かに百姓女に養育させる。素性を知らぬ王子は、13の年に親許を出奔し、Charles Martel の軍で武勲をたてる。その結果領主に出世し、王女にも恋するが、或る日年老いた農夫が、並居る宮廷人の前で、彼を抱擁したため、卑しい身分が暴露される。だが、昔王子を百姓女に預けた部下が、運よく彼の出生の秘密を明らかにし、彼は恋する王女と結婚する。

しかし、《Don Sanche d'Aragon》に描かれる個々の事件に、具体的材料を提供したのは、何より、Corneille の目の前で展開されていた政争そのものと言えそうである。又、作品の世俗的成功を妨げた人物の謎を解く鍵も、この点にあらう。

当時の観客がCarlosを見て、まず念頭に浮かべる人物は誰であろうか。低い社会的地位から異例の出世をとげ、王妃との関係を噂されている人物。

それは宰相Mazarinに他ならない。1649年末頃、反Mazarin派が飛ばしたパンフレット(mazarinade)の主要な攻撃テーマは、彼の出生の曖昧さにあった。海賊の息子ともシシリアの漁夫の息子とも、或いは修道僧の私生児の血をひく者とも、噂された。これに対しMazarin陣営は、確たる反証を挙げるができなかった。⁹⁾

Mazarinと王妃Anne d'Autricheの関係についても、第一次フロンド(1648-49)の頃、露骨な諷刺文が相次いだ。彼らは、秘密結婚(mariage de conscience)によって結ばれていると、考えられていた。49年7月パリ市民の耳目をそばだたせる事件が生じた。Morlotなる人物が、彼の発表したこの種の作品のために逮捕、死刑を宣告された。ところが、刑場へ連行する途中、暴徒が輸送車を襲い、彼を拉致したのである。

La Rochefoucauldの《Mémoires》にもある通り、¹⁰⁾ Condé大公派は、人々の間に反王妃、反Mazarinの感情を煽りたてるため、当然このようなスキャンダルを利用した。

《Don Sanche d'Aragon》でCarlosが、Donne Isabelleに向って、自分は彼女を愛すると共に女王として尊敬している。もし彼女が身分を忘れ、卑しい自分を愛するなら、彼女に対する敬意は薄れ、同時に愛も終るだろうと、述べる件がある。

«Je vous aime, Madame, et vous estime en reine,
Et quand j'aurais des feux dignes de votre haine,
Si votre âme, sensible à ces indignes feux,
Se pouvait oublier jusqu'à souffrir mes vœux,
Si par quelque malheur que je ne puis comprendre,
Du trône jusqu'à moi je la voyais descendre,
Commençant aussitôt à vous moins estimer,
Je cesserais sans doute aussi de vous aimer.¹¹⁾»

敬意に基づく愛という、Corneille劇の陳腐なテーマが繰り返されているだけのように見えるが、これを当時の観客が恐らくそうしたように、

CarlosをMazarin, Donne IsabelleをAnne d'Autricheに置き代えて眺める時、舞台は特殊な意味を帯びてくる。中傷(?)に汚された王妃と宰相の関係を、Mazarinに見立てられた主人公の口を通して、プラトニックな節度あるものとして示すことにより、観客の共感を彼らの側に引きよせそうとする意図が、見受けられるのである。《Don Sanche d'Aragon》が、Mazarinのための強力な弁明の書としての性格を持ち得る所以の一つが、ここにある。

では、第二次フロンドにおけるMazarinの最大の敵手、Condé大公の姿が、何らかの形で作品に投影されていないだろうか。

Condé大公一門が、公然と王権に敵対しているという口実を与える出来事が、1649年12月に生じた。duc de RichelieuとM^{me} de Ponsの結婚がそれである。婚姻は、Longueville 公夫人の肝いりで進められ、Condé大公自らが彼らを祝福した。夫人の目的は、この結婚により、Le Havreを自己の支配下に置くことであった、と言われる。¹²⁾

これ以前、ルイ十三世の治世に、王弟Gaston d'OrléansとLorraineの女王の婚姻の有効性をめぐって、法曹家の間に論争が生じた。当時、ルイ十四世は未だ誕生しておらず、Gaston d'Orléansは最有力の王位継承者とみなされていただけに、問題は深刻をきわめた。結局、婚姻は無効であるという結論に達する。理由は、王侯、大貴族は国王の同意を得ずして、婚姻関係を結ぶことができないと判断されたからである。¹³⁾

従って、50年1月の前月に行われたduc de RichelieuとM^{me} de Ponsの結婚は、過去の事例からして、MazarinにCondé大公逮捕の絶好の口実を提供することになった。

《Don Sanche d'Aragon》にも、王の同意を得ない、大貴族間の婚姻が描かれている。3幕4場でDonne Isabelleが、彼女の求婚者で大貴族のDon ManriqueとDon Lopeに、彼らの姉妹をCarlosと結婚させるよう要求する。二人はこれを拒絶する。というのは、彼らのいずれが女王の夫に選ばれるにしろ、選にもれたもう一方は、新しい王の姉妹と縁組を結ぶこ

とにより、王家と姻戚関係に入る密約を結んでいたからである。この事実を知った女王は、臣下である彼らが、意のままに姉妹の縁組を決めることは、王権への侵害になると憤る。

« Et ne savez-vous point qu'étant ce que vous êtes,
 Vos sœurs, par conséquent, mes premières sujettes,
 Les donner sans mon ordre, et même malgré moi,
 C'est dans mon propre État m'oser faire la loi ?¹⁴⁾ »

劇の最終部分を除いて、常にCarlosの仇役として終始する傲岸な大貴族の彼らが、とりわけCondé大公を連想させるのは、この結婚密約の件である。それは、上演直前に生じた事件の思い出につながるものであった。

以上述べた事実からして、《*Don Sanche d'Aragon*》には、Mazarin擁護の意図が秘められており、それがCondé大公を怒らせたのでないかと、推測できる。つまり、冒頭に述べた《*Don Sanche d'Aragon*》に敵意を示した有力者とは、Condé大公に他ならず、従って作品の初演時は、duc de Richelieu と M^{me} de Pons の結婚から、Condé大公逮捕の間、恐らく50年1月初旬と考えられる。

(I)

《*Don Sanche d'Aragon*》で明らかになった、CorneilleのMazarin擁護、言い代えるなら、Condé大公ら旧貴族勢力に比して、王権へ示された共感、彼の出身階級のイデオロギーをぬきにして、理解できないであろう。Goldmannは《*Le Dieu caché*》の中で、Racineの悲劇を彼の階級、つまりジャンсениスムに走った法服貴族の悲劇的意識の表現と、捉えた。¹⁵⁾ DortはGoldmannの観点を踏襲し、Corneilleの三十数編にのぼる作品の変遷が、法服貴族が体験した絶対王政への期待と幻滅の過程を、勿論ジャンсениスムと異った立場からであるが、体现していると考えた。¹⁶⁾

法服貴族とは、中世以来の伝統を持つ武家貴族又は旧貴族 (noblesse d'épée) に対して、財力を背景に官職 (office) を買とり、司法、行政

機構で重要な役割を果たし、新興のブルジョワ官僚階級（*officier*）をさす。彼らの上層部は、官職購入によって身分的にも貴族とみなされた。この階級の社会的上昇は16世紀に始まる。王権が封建諸侯に対抗して、ブルジョワを登用する過程で、彼らは売官の自由、官職の世襲を利用して、有力な家系を形成していく。高等法院勢力がその頂点に位置した。だが、1630年頃から、王権は、*officier* 層擁護から勢力抑制へと政策転換を始める。旧貴族の脅威が薄れるにつれ、強大になり過ぎたこの階級が、絶対王政確立の障害と映ったからである。宰相 Richelieu のとった政策の一つは、地方監察官（*intendant*）等、売官によらぬ国王直轄官僚（*commissaire*）制を強化することによって、法服貴族の弱体化を図ることであった。¹⁷⁾

我々の知る得る限り、*Corneille* の家系は、祖父の代からルーアンに定着した保有官僚（*officier*）層に属する。祖父はノルマンディ高等法院の、大法官法廷付き主任検査官（*conseiller référendaire à la chancellerie*）であり、1584年には、後に *corneille* が誕生することになる *rue de la Pie* の屋敷を買い取る。父も又、ルーアン子爵領治水山林事務官（*Maître des Eaux et Forêts en la vicomté de Rouen*）の職を勤める一方、ルーアン近郊の *Petit-Couronne* に土地を入手して、別荘を建てている。叔父、大叔父らも同様な法職にあった。*Corneille* 自身、ジェズイットの学院で学業を終えた後、1624年にルーアンの高等法院で弁護士（*avocat*）としての資格を得る。28年には、治水山林監督官（*avocat du roi au siège des Eaux et Forêts*）と海事審判所主任監督官（*premier avocat du roi en l'amirauté de France*）の二つの官職を買い与えられる。更に37年、恐らく《*Le Cid*》の成功に報いる意味で、*Corneille* の父に貴族の位が授けられる。¹⁸⁾

このように *Corneille* は、歴史のある段階まで王権と蜜月関係にあって、王に忠誠を尽くす一方、自らもブルジョワから貴族へ上昇していった典型的な *officier* の階級に属している。

Corneille の王権に対する信頼の念は、特に《*Le Cid*》（1637）から《*Cinna*》（1642）に至る、言わゆる傑作期の悲劇に顕著に現われる。

《Le Cid》のRodrigueが、父の恥辱をそそいだために、恋人のChimèneから仇とねらわれ、義務と愛情の間に解決不可能なジレンマが生じた時、劇をハッピー・エンドに導くのは、王Don Fernandである。Chimèneの名譽を汚すことなく、彼らの恋を成就させようとするDon Fernandは、この世で正義を行う者が不幸に陥ることを許さない、慈父のごとき君主の姿を代表している。《Horace》の主人公が、祖国を呪う妹Camilleを殺した際、彼の武勇と愛国心に免じて、肉親殺しの弾劾から彼を守り、生きることを命ずるのも、ローマ王Tulleである。《Cinna》の場合は、Augusteが皇帝であると同時に、劇中のhérosでもある点で、君主への最上の賛歌を奏でる作品となっている。彼を仇とねらうEmilieと恋人Cinnaを、苦悩の末、許す時、寛容さを備えた理想的君主像が呈示される。

«Je suis maître de moi comme de l'univers,
 Je le suis ; je veux l'être. O siècles, ô mémoire,
 Conservez à jamais ma dernière victoire !
 Je triomphe aujourd'hui du plus juste courroux
 De qui le souvenir puisse aller jusqu'à vous.¹⁹⁾»

《Don Sanche d'Aragon》の場合、既に述べた如く、作品と史実との関連を知る者にとって、作品がMazarinとAnne d'Autricheの関係を擁護する役割を負っていたことが明らかであり、その意味で作者の絶対王政支持を読みとることが出来よう。ただ、ここでは、《Cinna》までに見られた、全能の調停者としての君主は姿を消している。Donne Isabelleは、彼女の意に適わぬ三人の貴族のうちから婿を選ばねば、王位に留まれぬというハンディキャップを負った、弱い王である。彼女がCarlosと結ばれるには、実はCarlos自身が王位継承者であるという、まったくの偶然を必要とした。

《Don Sanche d'Aragon》を待つまでもなく、《Polyeucte》(1642-43)以後、善を体現する全能の君主は、二度と登場しなくなっている。Pompéeの死を知った際のCésarの寛大さは、彼の一瞬の表情が暴露した如く、背後に働く打算によって汚されている。²⁰⁾同じく《La mort de Pom-

pée》の Ptolomée や、《Théodore》の Valens は、第三者の意志に左右される傀儡君主にすぎない。《Rodogune》の Cléopatre や、《Héraclius》の Phocas に至っては、善と正反対の存在である。このような君主像の変化は、一つには作者の年令が、人間一般について、かつて程の楽天的見方を許さなくなったという事情もあろうが、又、巨視的な歴史の変遷が、個人の意識にただちに作用するものでないとしたら、彼の内に、ようやく、絶対君主が必ずしも彼の属する階級の良き保護者ではないという疑念が、生じ始めた証拠ともとれよう。

《Don Sanche d'Aragon》で、Corneille の出身階級のイデオロギーが、とりわけ鮮明に浮きぼりされるのは、Carlos と旧貴族 (noblesse d'épée) との対立においてである。

Noblesse d'épée を代表する Don Manrique や Don Lope の思想は、次のように要約できる。偉大さは、すべて血の内に起源を持っている。高貴な品性、勇敢な精神は代々親から子へ伝えられる。英雄的行為は、神聖な血統の具現化であり、結果にすぎない。かくて、自由意志が行為を実現する余地は消滅し、勇気等の美德は、王侯貴族の遺伝による占有物ということになる。Carlos が Aragon の王子であるという噂が流れると、態度を一変させて、Carlos の美点のすべてを、血統によって説明しようとするのも、こうした彼らの迷妄に近い信念に基づいている。

《Tant de valeur mérite une source plus belle.²¹⁾》

《Non, le fils d'un pécheur ne parle point ainsi, (- - -)

Je le soutiens, Carlos, vous n'êtes point son fils :

La justice du ciel ne peut l'avoir permis.²²⁾》

更に、彼らの遺伝学的決定論は、行為をなさしめる原因としての血統を重んじる余り、家柄の全面的尊重に達する。つまり、名門の血が、当事者にそれにふさわしい行為を行わしめぬ場合でも、依然として彼は尊重されねばならない。逆に行為が、卑しい階級の者によって行われれば、その行為がどれほど偉大でも、貴族の軽蔑を免れることはできない。Don Lope

がCarlosに着席を拒むのは、まさにこの理由による。

«Mais enfin la valeur, sans l'éclat de la race,
N'eut jamais aucun droit d'occuper cette place.²³⁾»

この典型的な封建思想に対し、Carlosは新興のブルジョワ階級にふさわしい信念を披瀝して、応酬する。

«Se pare qui voudra des noms de ses aïeux :
Moi, je ne veux porter que moi-même en tous lieux,
Je ne veux rien devoir à ceux qui m'ont fait naître,
Et suis assez connu sans les faire connaître.
Mais pour en quelque sorte obéir à vos lois,
Seigneur, pour mes parents je nomme mes exploits :
Ma valeur est ma race, et mon bras est mon père.²⁴⁾»

自分達と一諸に着席したいのなら、両親の名を言ってみると、Carlosを嘲る大貴族達に対し、彼は、《祖先の名で自らを飾りたてたい者は、そうするがいい。私は常に自分自身だけで十分なのであり、自分を生んでくれた人々から恩恵をこうむろうとは思わぬ。私は両親の名を告げずとも、武勇によって十分世に知られている。だが、お望み通り、あえて答えるなら、私の両親は武勲、勇気が私の家門、この腕が私の父である》という意味の答をする。

Carlosの返答は、先祖の勲功の上に安住して特権を貪ってきた、旧貴族に対する痛烈な批判と、己れの実力を頼りに上昇してきたブルジョワ階級の自信や希望を、表明したものと見えよう。《Don Sanche d'Aragon》が大革命直後の新世代を鼓舞した理由が、この点にある。²⁵⁾

だが、Carlosの、言わば体制にとっての危険思想が、結末において完全に中和され、破壊的效果を失っていることも、見逃してはなるまい。彼は結局 Aragon の王子であった。それならば、彼が劇の過程で、どれほど血統の効用を否定しても、Don Manriqueらの信念を傷つけることはできないだろう。漁夫の息子として育てられた彼が英雄たり得たのも、隠された

血のせいであるとするなら、決定論は依然健在と言う他あるまい。

もし血統を否定し、個人の実力だけに基づく社会を希求するなら、非難の矛先は旧貴族だけでなく、絶対君主にも及ぶはずであり、それは Ancien Régime の終焉を意味する。だが、穏健な絶対主義者 (absolutiste) であった Corneille に、そのような過激さを期待することは不可能である。法服貴族が、旧貴族の力をおさえる形で、国王の保護の下に上昇してきたことを思えば、《Don Sanche d'Aragon》の持つこの生半可さは、結局 Corneille の属していた階級の自己矛盾の表れと、解釈することができよう。

1651年2月、パリの情勢はMazarinに不利となり、彼はやむなくCondé大公らを釈放して、ドイツに逃亡する。Condé大公一門の勝利は、Corneilleの身边にも重大な影響を及ぼす。同年5月ノルマンディ州検事の地位に、前任者のBaudryが復職する。当然Corneilleは解任される。しかも、州検事職は、他の官職と兼任できなかったため、二十年以上勤めた監督官の職を、前年3月、買い値の半分以下で売り払っていた²⁰⁾。53年にMazarinがパリに帰還し、フロンドの乱が終る。しかし、Corneilleがこうむった損害の補償は、二度と行われなかった。その後のMazarinとの疎縁な関係は、恐らくこの時Corneilleが抱いた怨恨に発していると思われる。

悲劇の傑作期にみられる、君主への若々しい信頼の念と、Corneilleの最後の作品《Suréna》で、主人公が王子Pacorusの暗殺に仆れる事実を対照する時、我々はCorneilleの胸中にはぐくまれていった、絶対王政への幻滅を想像することができよう。Mazarinとのエピソードは、恐らくこのような幻滅の過程に拍車をかける、一事件であった。

【注】

- (1) Examen de Don Sanche d'Aragon, Œuvres complètes de Corneille (Seuil, 1963), p.498.

- (2) Cf., *Œuvres de P. Corneille* (éd. des Grands Ecrivains, 1862), t. 5, p. 400.
- (3) Cf., *ibid.*, p. 400.
- (4) Cf., Georges Couton: *Corneille et la Fronde* (Publications de la Faculté des lettres de l'Université de Clermont, 1951), p. 22.
- (5) Cf., *ibid.*, p. 20.
- (6) *Œuvres complètes de Corneille*, *op. cit.*, p. 875.
- (7) *Œuvres de P. Corneille* (éd. des Grands Ecrivains), *op. cit.*, t.1, P. LXXVII.
- (8) Cf., *Examen de Don Sanche d'Aragon*, *Œuvres complètes de Corneille*, *op. cit.*, p. 498.
- (9) Cf., G. Couton, *op. cit.*, p. 55.
- (10) Cf., *La Rochefoucauld: Mémoires* (éd., des Grands Ecrivains, 1874), t.2, p. 500.
- (11) *Don Sanche d'Aragon*, II, 2, 529-536.
- (12) Cf., *La Rochefoucauld*, *op. cit.*, t.2, pp. 161-162.
- (13) Cf., G. Couton, *op. cit.*, p. 47.
- (14) *Don Sanche d'Aragon*, III, 4, 985-988.
- (15) Cf., Lucien Goldmann: *Le dieu caché* (Gallimard, 1955), pp. 115-182.
- (16) Cf., Bernard Dort: *Corneille dramaturge* (L'Arche, 1957), pp. 157-164.
- (17) Cf., 井上幸治編: *フランス史* (山川出版社、1968)、pp. 185-186.
- (18) Cf., *Œuvres de P. Corneille* (éd. des Grands Ecrivains), *op. cit.*, t.1, pp. XXVI-XXVII.
- (19) *Cinna*, V. 3, 1696-1700.
- (20) Cf., *La mort de Pompée*, III, 1, 775-780.
- (21) *Don Sanche d'Aragon*, V, 5, 1626.
- (22) *Ibid.*, 1660, 1663-1664.
- (23) *Ibid.*, I, 3, 245-246.
- (24) *Ibid.*, 247-253.
- (25) Cf., G. Couton, *op. cit.*, p. 54.
- (26) Cf., *ibid.*, p. 62.

Don Sanche d'Aragon de Corneille

Nobuya MURASE

Dans le 1^{er} chapitre, nous avons d'abord essayé de mettre en lumière des liens du poète avec Mazarin.

On reprochait au Cardinal de ne pas avoir aidé les gens de lettres. Mais, Naudé, bibliothécaire du Cardinal, dans son *Mascurat*, nous apprend que Corneille avait reçu de Mazarin cent pistoles en 1643. Corneille en a remercié dans un texte joint à la Dédicace de « la Mort de Pompée ».

Corneille s'est chargé avec Valdor des « Triomphes de Louis le Juste », ouvrage de propagande officielle qui a été publié en 1649. Cet ouvrage faisait au Cardinal une publicité ostentatoire sous le prétexte de célébrer Louis XIII : là est présentée l'affaire de Casal où Mazarin s'était rendu célèbre d'un seul coup.

Le 18 janvier 1650, Mazarin fait arrêter Condé, Conti, et Longueville, gouverneur de la Normandie. Pour éviter que M^{me} de Longueville ne soulève sa province, le Cardinal entre à Rouen et se met à destituer les partisans de Longueville dans les postes importants ; il révoque le procureur des Etats et le remplace « par une personne capable dont la fidélité et affection sont connues, le sieur Corneille ».

Ces faits prouvent la confiance du Cardinal en Corneille.

Comme Carlos, héros de « Don Sanche d'Aragon », Mazarin est

un homme dont la naissance est mal connue et qui s'est élevé aux plus hautes charges de l'Etat. En outre, Carlos est aimé de la reine d'Aragon; cela nous rappelle que de nombreuses mazarinades ont accusé Mazarin et Anne d'Autriche d'être amants.

La ressemblance de situation nous fait penser que la pièce plaide en faveur du Cardinal et de la Reine. Carlos se défend d'oser aimer en Donne Isabelle un autre personnage que la reine, en lui demandant de ne s'éprendre de personne indigne de son rang (II, 2, 529-536); voilà l'idéal de l'amour fondé sur l'estime. Ces vers servent peut-être à défendre le Cardinal et la Reine contre la réputation diffamatoire de leurs rapports.

On peut trouver facilement l'image de Condé dans les grands seigneurs arrogants : Don Manrique et Don Lope. Ils se sont engagés à donner en mariage leur sœur à celui qui ne deviendra pas roi. Ce mariage qui n'est pas ratifié par la reine évoque celui du duc de Richelieu et de M^me de Pons. C'était Condé qui voulait l'autoriser en décembre 1649, sans aucun consentement de la Reine.

Nous croyons donc que la pièce était apologétique. Pour cela, elle s'est attiré la disgrâce de Condé, ennemi de Mazarin.

On ne doit pas sous-estimer l'influence qu'ont sur le dramaturge Corneille ses origines. Il appartient à un groupe social : celui des officiers qui travaillent dans l'intérêt du roi et dont la promotion sociale dépend de celui-ci. Son attachment au pouvoir royal, comme nous l'avons indiqué dans le 1^{er} chapitre, provient donc de ses origines.

Dans la dispute avec les Grands, Carlos pose le problème du mérite et de la naissance : il faut estimer quelqu'un selon son mérite et non pas selon sa naissance (I, 3, 247-253). Ces beaux vers ont eu un grand retentissement dans une époque révolutionnaire. «Don Sanche d'Ara-

gon » apparaît ainsi comme la pièce la plus subversive de tout le théâtre cornélien. Mais, à la fin de la pièce, la question subversive s'évanouit : Carlos est né prince. Alors, il n'existe plus d'opposition entre le mérite et la naissance. Ce dénouement fait preuve du conformisme du poète.